
私の彼氏は野球選手

青矢しずく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の彼氏は野球選手

【Zコード】

Z7879M

【作者名】

青矢しづく

【あらすじ】

叶うはずがないと思っていたけど、夢は追い続けると叶う！！恋愛は、思い続けると届く！！燈和の彼氏は、11歳年上の野球選手！？途中からちょっと諦め入っちゃつたので…それでもいいという方は、ぜひ読んでください（笑）

001 キャンプin

キャンプシーズン突入。

富崎には、サッカーチームだの野球チームだの、プロのチームがたくさん来る。

あるサッカーチームは、今年優勝を果たした。
ある野球チームも、優勝した。

そのほかの大会でタイトルをとったチーム、そして世界で活躍した選手。

そんな人たちを一目見ようと、観光客でいっぱいになる。

地元に住む少女も、そのキャンプを見に来ていた。
毎年、サインをもらつたり写真と一緒に撮つてもらつたりしている。

今年は、試合を見る計画を立てていた。

藤井燈和には、今年注目している選手がいた。

野球選手で、今年ドラフト1位で入団した選手。
社会人野球のチームからプロ入りした、長谷川智行。

実力は、全球団が認めていた。

7球団が1位指名をしていたとか。

バッティングはもちろん、その守備範囲の広さにも定評があった。
そして、何と言つてもルックス。

イケメンと言えばイケメン。

可愛いと言えば可愛い。

爽やかと言えば爽やか。

身長180センチで、細身の選手だ。

すでに女性人気は群を抜いている。

なにより、細身でも腕の筋肉がすごい。

何気に腕フェチな燈和にとっては、もつたまんなかつた。

練習終了後、バスに乗り込む長谷川を見つけた。燈和のテンションは、もうMAXを過ぎていた。

「キャー！」

黄色い歓声が、いつそう大きくなつた。

バスに乗り込む時も、まわりの歓声にちょっと照れながら乗つていく。

席に座つてからも、外からの歓声は聞こえていたろう。

みんなが手を振つて、キャーキャー言つている。

燈和も、手を振つた。

大きく、ちょっと目立つように。

すると、それに気付いたのか、ちょっとだけ振り返してくれた。

初めは、燈和だけに振つているのかと思つた。

けど、まわりにはたくさんのファンがいる。

私だけってこと、あり得ないよね…

それでも、やっぱり嬉しかつた。

受験生になることなんて、すっかり忘れていた。

前もつて買つていた練習試合のチケット。

当日、今まで見た事がない様なほどの人が、球場につめかけていた。
試合開始2時間前に来たのに、行列の最後の方に並んだ。

並んだ後も、まだたくさん後ろに人が来た。

それだけみんなこの試合が見たかったんだろうなあ…

なんたつて、長谷川の公式戦デビューなのだから。

女性ファンが、ユニフォームを着てたりタオルを持ってたり。

それはもう、たくさん背番号22がいた。

燈和は、グッズを何一つ持っていない。

だから、普通のロントにパークーを羽織つて、ジーンズという格好
だった。

どう見ても、女の子らしさというものがない。

まあ、これが燈和なのだから仕方がない。

球場に入ることが出来たのは、並び始めて40分過ぎたころだった。
チケットを見せて、急いで1塁側の外野席に行つた。

前方を出来るだけとりたかったけど、結局前から6列目だった。
後ろから数えると、5列目。
半分よりも後ろだった。

もうちょっと早く来ればよかつたかなあ…

少しだけ後悔しつつ、試合開始を待つた。

開始時刻10分前くらいに、バッテリーが発表された。

両チームとも、Hースを出してきた。

相手が右なら、こっちは左。

対抗心むき出しのよう見えた。

選手の練習が行われている間、燈和はメールをしていた。

同じ野球好きの親友、たかはしひな高橋妃奈乃。

チケットをとろうとしたけど、ちょうど陸上の大会とかぶつて来られなかつたらしい。

妃奈乃に、球場の様子や選手の練習風景など送つてあげていた。それを送るたびに、妃奈乃からはこう返事が来た。

『私も長谷川選手見たかつたなー』

妃奈乃も、長谷川を注目していた。

プレーの面でもだけど、やっぱり顔。

いつも、すべては顔だ！！っと言つている。

燈和は、それを聞いて苦笑していた。

バッテリーが、投球練習を終えた。

外野でキャッチボールしていた選手も、みんなベンチに下がつた。いよいよスタメン発表だ。

ドキドキ、ハラハラ…

長谷川の名前は、8番目に呼ばれた。

プレイボール。

長谷川のいるチームは、後攻。
だから、今は守備についている。

ポジションはライト。

もとはセンターだったらしいけど、このチームには不動のセンター
がいる。

だから、いつも口口口口変わっていたライトに入れられたのだ。

下を見ると、長谷川がいる。

ちょっと視力が悪いから見づらいけど、生き生きしてるように見え
た。

相手バッターが、バットを折りながらも打ってきた。
思った以上にボールは伸びて、長谷川の前に落ちた。
緊張していたのか、手元で戸惑っている。
すぐさま相手ランナーは2塁へ向かった。

2アウト2塁。

続く4番バッターは、去年のホームラン王だ。
かなりの強打者で、得点圏にランナーがいる時にめっぽう強い。
豪快なひと振りで、打球はバックスクリーンに直撃。
ホームランを打たれてしまった。

1回の表、2失点。

その後、ランナーをためながらもしつかりと3アウトにした。

1回の裏は、3者凡退で終わった。

2回以降、得点が入らなくなつた。

長谷川の初打席は、見逃しの三振。

そのまま8回の裏。

2アウトながらも、ランナー3塁のチャンス。
バッターは長谷川だつた。

「かつ飛ばせーっ、長谷川！」

きれいなフォームの長谷川。

1球目は見送つてボール。

2球目は、バットに当てたけどファール。

3球目、4球目とボールが来て、1ストライク3ボールとなつた。
相手ピッチャーは、思いつきり腕を振つて投げた。
そのボールを、バットの芯に当てた長谷川。

レフト方向へ一直線。

惜しくもホームランにはならなかつた。
だけど、俊足も生かして3塁打になつた。
そして1点を返した。

1塁側外野は、大歓声が上がつていた。

9回の裏、長谷川は交替した。

代打で出てきた選手が2ランホームランを打つて、サヨナラ勝ちを
した。

会場は、地響きがするほどうるさかつた。
けど、それがよかつた。

燈和は、あの瞬間を思いながらバスを待つた。

やつぱりここには子供、もしくは女性ファンばかりだ。
ここに紛れて、また帰つてくる選手に手を振つていた。
7人目に、長谷川が来た。

いちだんと歓声が大きくなる。

燈和は、再び大きく手を振った。

すると、今日もまた振り返してくれた。

周りの人も振っていたけど、どうしても目があつたように思つてしまう。

自意識過剰なだけなのか…

氣のせい、なんだよね…？

変な感覚にみまわれながら、燈和は帰りの電車を待つた。

004 受験生、燈和

あの試合のことが、今でもよみがえつてくる。
初めて生で見た試合。

すごく感動した。

リーグ戦ではないものの、しっかりとした公式戦なわけだから。
チケットは、今でも大事にとっている。
フォトブックの1ページ分、チケットで使っていた。

学年1つ上がった、中学3年生になった。

受験生と周りは言つ。

だけど、燈和には全く自覚がない。

毎日、家に帰ってきたらテレビ。

しかも、野球中継。

宿題は、ほとんど学校で終わらせてくる。

普通の家庭なら、家で宿題をしている時間帯。

野球中継真っ最中。

食事の時間も野球を見ながら。

なぜこんな事になってしまったのか。
それには、大きな理由があった。

中学1年の終わりごろ。

親が離婚し、燈和は母方についた。

毎日、遅くまで働くようになった母。

正直、家に一人でいる時間は寂しかった。

ふとテレビをつけた時、ちょうど野球中継があったのだ。

9回の表、大ピンチを迎えていた。

そう解説者は言っていた。

背番号17のピッチャーが、汗をかきながら必死でサインを見ている。

ランナーを気にしながら、投げた。

判定はストライク。

この瞬間、燈和の中に何かが生まれた。

凄いという感情に加えて、ハラハラ、ドキドキするような感覚。野球には、一人でいる寂しさを忘れさせてくれる力があった。

燈和は、野球中継を見た後すぐ風呂に入つて寝た。

夢に、長谷川が出てきた。

最近しようちゅう出てくる。

それだけ考えているのだけビ。

あれから長谷川は、ライトのレギュラーに定着しつつあった。

ほとんどの試合、ライトを務めている。

そして、打順は8番から上がった。

最近よく6番を打つ。

近い将来は4番を打たせたい、と監督は言っていた。

また長谷川選手、見たいなあ…

その思いが、徐々に強くなつていつた。

ただし、今年は試合に行くことが出来ないだろう。

正真正銘、中学3年の受験生なのだから。

キャンプシーズン中に、推薦ならば受験がある。

キャンプも諦めることになるのか…

燈和には考えられなかつた。

005 誕生日プレゼント

燈和に朗報が舞い込んできた。

燈和の誕生日、7月20日に試合がある。

その試合に、母が連れて行つてくれるというのだ。
働いてためたお金で、試合に連れて行つてくれる。
感謝、感謝の一言だつた。

学校の授業時間も、1日も、早く感じた。
夏休み中に試合観戦。

しかも、それは誕生日プレゼント。

最高としか言いようがない。

浮かれ過ぎに注意しながら、その時を待つた。

そして20日。

教訓を生かしながら、試合会場に早く着いた。
それでも先客はいる。

今回は、わりといい席が取れそうだった。
選手の応援歌も覚えて、グッズもそろえた。
お年玉を使って、ユニフォームとタオル。
もちろん、長谷川の背番号22の入ったものを。

「いいでいい?」

「燈和の好きなところにしなさい」

「ありがと」

母は、いつも他の人に若く見られている。

確かに、この年にしてはかなり綺麗だと、家族ながら思っていた。

ときどき、友達と思われる事もあった。

それは、わりと燈和が大人っぽいってこともあるのだけど。

選手はウォーミングアップを始めていた。

長谷川の姿もあった。

思いつきりタオルを広げて、高く掲げる。

すると、それに気づいたのか、手を振ってくれた。

また、燈和だけに振ったように見えた。

だけど、これまた周りにはたくさんの女性ファンがいる。

いつも勘違いしちゃうから…もしかすると、私みたいに思つてる人いたりして

とか思つたりしていた。

試合が始まると、さすが相手は去年の2位。
強くて、投手戦と言つたら投手戦。

打撃戦と言つたら打撃戦。

意味の分からないことを言つてるようだけど、本当にそうなのだ。

0対0のまま8回終了。

ただ、両チームとも2ケタ安打。

9回、長谷川に5回目の打席がまわってきた。

タオルを掲げて、みんなと一緒に応援した。

「かつ飛ばせーっ、長谷川！」

粘つて、粘つて、粘つて…

9球目くらいだろうか。

力強くバットを振り、ボールは芯に当たった。
打球が燈和の方へ飛んでくる。

あ、あぶないっ！！

目をギュッと閉じて、縮こまつた。

ボールは、燈和の座っていたベンチの背もたれにあたつた。
そのまま背中にボールが伝つて行くのが分かる。

「ボール…」

初めはボールが飛んできたことしか頭になかった。
でも、よく考えるとホームランだ。

9回表、長谷川のホームランで1点とったのだ。

ボールは飛んできて、今手の中にある。

長谷川のホームランボールだ。

そして、いちだんと大きくなつた応援は、燈和の誕生日を盛大に祝つてゐるようだつた。

嬉しさのあまり、涙が出てきた。

こんなに嬉しい誕生日プレゼント、初めてだよ…

ボールを強く握りしめ、タオルに顔をうずめた。

それはもう、とつておきの誕生日プレゼントだった。

あの試合、9回裏に逆転されて、サヨナラ負けだった。

それでも、大好きな長谷川がホームランを打ってくれた。

そしてボールが今、手元にある。

勝ち負けに關係なく、本当にうれしかった。

「ファンレター、書かないの？」

「ファンレター？」

「そう。だって、嬉しかったんでしょ？それを選手に報告しなくち
ゃ」

母からそう言われた。

長谷川にファンレターを書こうとしている燈和。

だけど、何を書いたらいいのか思い浮かばない。

とりあえず、パソコンでファンレターの書き方を調べた。

「まずは、挨拶と自己紹介…受験生です的な？」

できるだけ丁寧な字で、手紙を書き始めた。

書き方の通りに書いて行くと、一枚半になつた。

そして、文章がおかしくないか読みなおした。

ごく普通の、あり当たりな手紙のように思えた。

何のインパクトもなく、つまらないものだった。

「いれじゅ、ダメじゅん

くしゃくしゃにした紙を、ゴミ箱めがけて投げた。
いつもは入らないのに、今日は運よく入った。

「おつーストライクー！」

インパクトのある手紙にしたい。

そう思つと、ますます何から書けばいいのか悩む。
とりあえずとこつ事で、自己紹介的なものは書いた。
あとは内容。
どう伝えたらいいのか…

とりあえず、手紙書く理由を考えてみよう

手紙を書く理由はただ一つだった。

あの感動、喜びに感謝したい。

お礼が言いたい。

ただそれだけのことだった。

「それだつ！」

燈和の手が動き始めた。

動き始めると止まらない。

どんどんペンが進む。

書き終えると、封筒に住所を書いて、切手をはつた。
急いで家を飛び出し、近くのポストへ向かった。

夏の暑さよりも、この手紙がしつかりと届いてほしいことこの思いこの

方が強かつた。

しっかり、届きますように！！

燈和は、ポストの前で手を合わせていた。

時は経ち、キャンプシーズン。

あのファンレターの返事は、もちろん来ない。
理由は簡単。

人気のある選手がいちいち返事を書いていると、相当なものになる
からだ。

だから、別に気にしていなかつた。

学校帰り、制服のまま急いでキャンプ地に向かつた。
休日よりも、平日の方が人が少ない。
だから、選手に会える確率が高いのだ。

公園内を、選手が歩いて移動するという事もある。
その希望にかけて、燈和は急いでいた。
ちゃんとサイン帳も持つて。

ちょうど練習が最後の方になつていた。
選手が次々とロッカーへ引き上げている。
チャンスだ。

今日の練習場所を確認して、室内練習場へ向かつた。
そこには、女性ファンが予想以上にいた。
長谷川田当てだろう。
燈和もだけど。

選手がどんどん出でてくる。

燈和はサイン帳を差し出して、出でくる選手全員にもらつた。

あとは長谷川だけだ。

そう思つてゐるうちに、大きなバッグを持つて長谷川が出てきた。
また歓声が大きくなる。

燈和は、みんなに負けないようサイン帳を差し出した。

隣にいる人が押してくる。

だから、持つていたペンが転がつて行つてしまつた。
名前が書いてあるから、たぶんあとで見つかるだらうけど。
これじゃ、サインを書いてもらえない。
ショックのあまり、サイン帳を引っ込めてしまつた。

「長谷川さんっー！」

隣にいた人が叫ぶ。

すると、こちらへ寄つてきた。

そして、その人にサインをしてあげた。

目の前で見ていて、悔しかつた。

あのペンさえ落ちていなければ…

「ジン…

足元で、音がした。

わざと落としたペンが、チラッと見えた。

「あつ、あつた！」

拾おうとするけど、手が届かない。

すると、誰かの手が伸びてきて、そのペンを拾つた。
視線を上にあげると、長谷川が燈和のペンを持っていた。

「藤井…なんて読むんだろ?」

長谷川が言った。

自分の名前を読もつとしている。
それだけでも嬉しい。

「『ひよつ』です!…」

「燈和!? 難しい名前だなあ…」

長谷川は、顔をあげながら言った。

顔をあげ切った瞬間、視線がバツチリあつた。
燈和は急に恥ずかしくなつて、田をそらしてしまつた。

「はい」

そう言つと、燈和に手渡した。

「あ、ありがとうございます!…」

周りのみんなが、羨ましそうに見ている。
だけど、燈和にはそんなことどうでもいい。
サインをしてもうひつ事も忘れて、だた名前を呼んでもうひつ事に感
動していた。

燈和は、3キロ減のダイエットに成功した。

というより、もともとダイエットはしていない。いつの間にか体重が減っていたのだ。

『恋する女は綺麗になる』

このことを指すのだろうか、と燈和は思っていた。

受験成功は遠い昔の話。

今は思いっきり高校生活を楽しんでいる。

高2の冬、再びキャンプシーズンがやってきた。制服のまま、キャンプ地へと向かつた。

ここ最近、毎日のように詰めかけている。

だから、もしかしたら顔を覚えてもらえたかもしれない。が、正直分からない。

公園内に着いた途端、いきなり大粒の雨が降り出した。雨をしげる場所を探すと、1か所しかなかった。

フル横の自転車置き場。

自転車が数台置いてあるだけで、ガラガラだ。

そこで雨宿りすることにした。

誰かが走ってくる音が聞こえる。

軽快なリズムだ。

どこから聞こえてくる……？

目もかすんで、雨の音もつるむくで、よくわからなかつた。

だんだん音が近づいてきて、ゆるまつた。

右を向くと、ぼんやりと人影が見える。

だんだん近づいてくるその影は、次第に見覚えのある服を着ていることが分かつた。

チームの練習着。

かなり近くまでその人が来た時、心臓が止まるかと思つた。長谷川だつたのだ。

「長谷川選手……ですよね？」

「はい」

「あの、サインしてくださーい！」

燈和は、持つっていたサイン帳を差し出した。
もちろん、中2の時に買ったペンと去年買ったサイン帳。
1冊、サイン帳というものが完成したから、去年買い足したのだ。
長谷川は、サラサラとサインを書いて行つた。

「あれ？えつと……」の字、確かひ、ひより、だっけ？

「は、はい……」

「ペン、落とした子だよね」

「そ、そうです……」

長谷川は、燈和のことをなんとなく覚えていた。
泣きそうなほど感激だつた。

「学校帰り？」

「そうです」

「学校から直接来ただんだ？」

「はい。終わってすぐ、飛び出でました」

「部活は？」

「部活、月・水・金に集まるだけだから……」

「えつ？ 何部？」

「新聞部です」

「へえ～。野球部のマネージャーかと思つてた」

「雨はまだやまない。

この時間がもつと続けばいいのに……

009 雨、雷、練習着

雨は、まだ止む気配がない。

それよりも、一層悪くなつてゐるようにも思えた。

「天氣、悪くなつてきたね」

「そうですね…傘、持つてきてないのに…」

「帰りどつするの?」

「大丈夫です。電車にさへ乗れば、どうにかなります」

「なんか心配だけど…」

長谷川が田の前にいて、今この瞬間、一緒に会話している。
そして、心配までされた。

これ以上の嬉しい事つて、あるのだらつか?

燈和と長谷川は、談笑しながら雨が止むのを待つた。
ただ、本当に止む気配はない。

ピカッ!

一瞬光つた。

すると、数秒後に遠くから雷の音がした。

「雷まで鳴りだした…」

燈和は、正直雷がすこく苦手だった。

ピカッと光るのも嫌だし、何より音がダメなのだ。
その場に足がすくんでしまう。

今のは、まだ遠くに落ちたから大丈夫なだけで。
家にいる時は、近くに落ちる場合は布団の中にもぐりこむ。
それでもしないと、本当に怖かった。
特に、家には1人なわけだし。

ピカッ！

また光った。

ドンッ！！

「ウキヤッ！」

やってしまった。

世界で1番見せたくない人の前で、1番みつともない姿を。
みつともない声を、出してしまった。
燈和は、その場にしゃがみこんだ。
怖くて、立てそうにない。

「だ、大丈夫？」

「…だ、大丈夫です」

ドーンッ！

「うわあっーー！」

恥ずかしくてたまらない。
だけど、怖くて仕方がない。

恥ずかしいとか、そんな感情よりも『怖い』の方が大きかった。

目をギュッと閉じて、耳もふさいだ。

視覚と聴覚、両方ふさいだら、もう大丈夫なはず。

ふと目を開けた。

すると、同じ目線に長谷川がいた。

「本当に大丈夫？」

驚きのあまり、後ろに尻もちをついてしまった。

「ごめん、驚かせた？」

「大丈夫です。…雷よりは」

「雷、苦手なんだね」

「昔から雷だけはダメなんですね…」

「俺は平気なんだけどね」

もし、長谷川が雷におびえていたら…

考えると、ちょっとだけおかしくなつてくる。

空が光った。

ドーンッ！！

光った瞬間、音が鳴った。

この近くに落ちたんだろう。

燈和は、何が起こったのか分からなくなつた。
パニックになり過ぎて、自分が何をしているのかさえ分かつていな

い。

徐々に雷の怖さを脱出してみると、手に濡れる感触があるのが分かった。

そこで、はつと戻った。

驚きすぎたあまり、近くにいた長谷川の練習着を掴んでしまっていった。

「あつ／＼／＼

恥ずかしすぎる。

だけど、長谷川は優しかった。

「濡れてるけど、いいよ」

やつらついで、頭をなでてくれた。

010 ハジまが本気？

頭は真っ白になるし、顔は真っ赤になるし…

どこまで本氣で受け止めていいのか、分からなくなつていた。

今、長谷川は燈和の頭をなでている。

プロで活躍するスター選手が、普通の女子高生の頭をなでている。

普通に考えると、おかしな光景。

今は変な雑誌とかもあるわけだし、こいつ事が誤解を招くのだろう。

だけど、やめてほしくなかつた。

大きな手が頭に乗つていると、落ち着いた。

「少しは落ち着いた？」

「はい…」

「よかつた、よかつた」

雨が、少しずつ弱くなつてきた。
それでも結構降つているのだが。
だんだん、周りが明るくなつてきた。
太陽が見え始めたのだ。

「止みそうだね」

そつと言つている間も、長谷川の手は燈和の頭の上に乗つていた。
逆に燈和の手は、長谷川の濡れた練習着を掴んでいた。
やっぱり誤解を招く光景。

人が通つていたら、きっと驚くだらう。

完全に雨がやんだ。

チームの練習時間も、もう終わりに近付いている。

「もうそろそろ、合流しないといけないんじゃないですか？」

「そうだなあ、行かない？」

「じゃあ、頑張つてくださいね！応援してるんで」

「ありがとう。そう言つてもらえると、本当に嬉しいから」

そう言つて、少し照れていた。

長谷川は脱いでいた練習着の上を、絞つてまた着た。
いつ見ても、爽やか。

笑う所なんて、爽やか中の爽やか。

燈和には、この時間が幻のように思えた。

「じゃあね
」

…！

幻のように思えた。

幻…幻…まぼ、ろ、し？

長谷川は、また軽快に走つていく。

燈和は、ただぼつ然とその姿を見ていた。

…一度、頭の中を整理してみよう

燈和は、記憶をすべて巻き戻していた。

長谷川が言つた後、確かにした。

その時の様子を、考えていた。

「じゃあね

」

そう言つと、燈和の顎をクツと上げ、軽くキスした。
あれが夢や幻でなければ。
いや、現実のはずだ。
手が濡れている。

練習着を握っていたから。

思い出すと、せりに赤面した。

どこまで誤解を招くようなことをするのか。

本当に、何かの雑誌のスクープにもなりそうなことなの!』

『球界のスター、熱愛!? お相手は女子高校生』

こんな見出しが、雑誌に載つてしまいそうなことなの!』
正直、燈和自身は本気で長谷川に恋している。

だけど、長谷川にはこれっぽっちもそんな気はないはず。
長谷川の行動は、かなり燈和を悩ませた。

011 妃奈乃の説教

夏休み明け、いまだにあの火照りが覚めていないようだった。
そんな気もないのに…
本気で燈和は悩んでいた。

授業は、まともに受けれる事が出来る。
だけど、妃奈乃と話す時がちょっと辛かつた。

「長谷川選手にさあ

「／＼／」

「ど、どうしたの？」

「い、いやあ、何でもないよ。長谷川選手がどうしたの？」

「ファンレター送ったんだけど、やっぱ返事来ないよね？」

「うーん、今1番人気の選手だからねえ」

球界のスターと言われている。

だから、ファンレターくらい山ほど来るはずだ。

この前のインタビューでは、人の倍以上来るとか言っていた。

「燈和さま、修司君のことどう思つてる？」

「真田君？どうつて…野球少年」

「そういう意味じゃなくて…ほら、カツコいいでしょ？真田君つて

「カツコいい…それだったら長谷川選手の方が

「燈和！もつと現実的な恋しなよつ！長谷川選手は、人気選手なん
だからねつ…！」

これだけ面と向かつて妃奈乃に言われたのは、初めてだった。

燈和自身も、現実的な恋をしないといけないことくらい、十分承知していた。

だけど、やっぱり理想は長谷川。

それ以外、考えられなかつた。

「私にはさあ… こう、なんて言つか… 現実的な恋?とか言うの、向いてないみたいなんだ」

「そうだよね! 燈和は、ただ人をその気にさせておくだけだよねっ！」

「そんな言い方ないでしょ? 私がいつそんな汚いことしたっていうの!」

「やつぱり気付いてないじゃん! 修一君、燈和のこと好きなんだからねっ」

は、初耳…

真田は、学校でかなりモテている。

告白された回数なんて、人の倍以上あるはず。

燈和の記憶上、確かに妃奈乃も真田のことが好きだった。

「… 真田君、いい人だけね。やっぱ私には長谷川選手しかいないんだ」

「燈和ならそういつつと思った。でも、修一君に話さないと、私が許さないよ」

妃奈乃是そう言つて、鞄を持って帰つて行つた。

その場に1人残された燈和は、机の上に崩れ落ちた。自分がどんな人なのか、さっぱり分かっていない。

妃奈乃に言われて、気付いた気がした。

周りの人にいい顔ばかりして、優しくて出来る人ぶつて。

実際そんな器用な人じやない。

自分で自分を苦しめていた。

あれから数週間後、燈和は真田に告白された。
しかも、みんなの前で。

だから、振るに振れなかつた。

真田には申し訳ないと思つてゐる。

でも、自分自身を変えるチャンスなかもしれない、と燈和は思つていた。

生徒公認のカッフルとなつた燈和と真田。

下校も一緒にするようになつたし、友達を誘つてダブルデートもするようになつた。

次第に、燈和は真田のいいところしか映らなくなつてゐた。

長谷川のことは、憧れとしか思わない。

今までの感情が、ウソのようだつた。

「毎年キャンプ見に行つてるんだろ?」

「うん、そうだけど」

「今年、俺も行きたいな」

「じゃあ、一緒に行こうよ! 今年も試合あるわけだし」

キャンプシーズン突入。

去年の記憶は、燈和の中になかつた。

選手の練習風景をみながら、真田はプロ宣言した。

そうなつてほしい、と燈和も思った。

練習終了後、サインをもらうためにまたあの人「みの中に紛れた。今日はいつも以上に人が多い。

「人、多いな」

「毎年来てるけど、ここまで多いのは初めてかも」

「はぐれるなよ？」

「大丈夫だよ。はぐれたら、球場の入り口にいるから」

「そつか、なら大丈夫」

サイン帳とペンを持つて、前列へと進んでいく。
もともとあまり身長が高いわけでもない燈和だから、すぐ前を譲つ
てもらえた。

この身長に感謝。

次々と選手が来た。

新人の選手もいれば、ベテランの選手もいる。
その中に、長谷川の姿もあった。

一斉に歓声が大きくなる。

燈和は、いつもみたいに手を大きく振った。
すると長谷川は、また振り返してくれた。

いつものことだから、当然この時みんなに振つていたのだと思った。
もう、自分だけに振つているなんて思わない。
だけど、やっぱり目があつた気がした。

サイン帳は、またいっぱいになつた。

「新しいの、買わなくちゃなあ」

「すごいよな。ある意味尊敬するよ」

バスがまだ出発していなかつたけど、燈和は真田のもとへ向かつた。

真田は、後ろの方で待つていてくれた。

ふと後ろを振り返ると、ちょうどバスのエンジンがついたところだつた。

長谷川は窓側の席にいる。

なんとなく、こっちを見ているようだった。

013 悪天候

今日は真田と一緒にじゃない。

真田は家の事情とかで、早退した。
だから、久々に1人でキャンプ地を訪れた。

天気はちょっとだけ悪い。

今日は運よく傘を持つてきている。
これなら、雷が鳴らない限り大丈夫だ。
すでに、かなり遠くの方では雷が鳴っているのだけど。

何気に予想していたことが当たった。

雨が降り出したのだ。

次第に強くなつていく。

大丈夫じゃなくなつてきた。

折りたたみじやなくて、しつかり傘を持つてきていたのが正解だった。

遠くから、人が来た。

薄暗い中、ぼんやりと見える。

見たことのある光景。

燈和の記憶が、少しずつよみがえってきた。

練習着を身にまとっている、身長の高い選手。

もう、結構濡れていよいよ見えた。

顔がはつきりと分かつたのは、すれ違つてからだった。

長谷川選手…

何も言わずに通り過ぎていく。
それがいじょうに悲しい。
思わず足が動き出した。

「長谷川選手！…」

呼びとめると、足が止まった。
そして、ゆっくりと振り返つてくれる。
今、視線がバツチリあつた。
今度は目をそらすことが出来ない。
そらすと、またどこかへ行つてしまいそうだったから。
燈和は、持つていた傘を差し出した。

「濡れますよ？」

「あ、ありがとうございます。」

とつあえず、濡れない屋根の下へ向かった。
またあの自転車置き場だった。

傘を閉じて、自転車置き場の柱に立てかけた。
下はびしおびしおに濡れていた。

「今日、彼氏君は？」

「えつ…」

「この前一緒にいた子、彼氏でしょ？」

「つぱつぱうだつた。」

燈和と真田を見ていた。

「…今日は、家の事情とかで先に帰りました」

「そうなんだ。じゃ、1人だ？」

「…はい」

…ツクシユンツ！

長谷川がくしゃみした。

予想以上に可愛くて、思わず笑つてしまつた。

「…やっぱ、このくしゃみって変だよね？」

「変とかじやありませんっ！ただ、めちゃめちゃ可愛いです」

「よく女の子みたいって言われるんだ」

言つた人の気持ちがよく分かる。

燈和は心の中で笑つた。

数分後、またくしゃみした。

心配になつてきた。

濡れたから、風邪をひいてしまつたのか。

もつとひどい場合、熱が出てきたんじやないか。

「大丈夫ですか？寒くないですか？」

「大丈夫だよ。うん、心配かけてごめんね」

そう言いながらも、寒そうにしていた。

燈和は、鞄の中から上着をとりだした。

「よかつたら、コレ使ってください。練習着、濡れたままだと風邪

ひこちゅやこまかよ

「でも…いいの？」

「はー」

「ありがとー！」

かなり大きめのサイズで買つていた白のパーカー。
持つていてよかった、と思つた。

しかし、長谷川の様子がおかしい。
本当に熱があるのかもしねない。

「ふらふらしたりしませんか？」

「ふらふら…分からぬけど」

試しに、額に手を当ててみた。
かなり熱い。

これは確實に熱がある。
このままじゃ、大変だ。

「熱があるじやないですかーー！」

「本当に？」

「本当にですって。早く雨やまないかな…とりあえず、休んだ方が
いいですよ」

「なんか、お母さんみたいだね」

「えつ…あ、そ、そうですか？」

学校でも言われた。

お母さんみたいだ、と。

「雨がやむまで、ここにしてくれる？」

...
-
-

雨はやまない。

何となくだけ、長谷川はさつせよじもあつねにしている。

本当に大丈夫なのかな…？

「熱…まだかなりありますよ。早く救護室とか行つた方が…」
「…でも、正直まだココにいたいんだ。救護室つて、一般の人入れ
ないから」

それをどういう意味で受け取つたらいいのか。

燈和は、今まで悩んで困っていたことを思い出した。
これっぽっちも思つてないくせに、その気があるよひたぶるまい。
好きだけど、ちょっとだけムカつくな。

「あの…率直に聞きます。長谷川選手って、ドレですよね？」
「うーん、そうなのかな？分からない」

いや、明らかにドレだつて

雨がやむ気配はなく、雷が近づいてきた。

徐々に音が大きくなつてくる。

燈和は、その場につづくまつた。

「…雷、怖いんだつたね」

「はい……」

長谷川は、燈和の隣に座った。

燈和は驚いたけど、このままでいたいという気持ちの方が大きかつたみたいだ。

今、実際に燈和の心は揺れている。

長谷川が好き。

でも、長谷川にその気はない。
だから、真田に逃げているだけ。
でも、真田も嫌いじゃない。

ピカッ！

ドンッ！

「ウキヤツ……」

ゴチンッ

燈和は、驚いた勢いで柱に頭をぶつけた。
ジンジンする。

「つたあ……」

「大丈夫？」

「私は大丈夫です。頭、丈夫なので……長谷川選手の方が心配ですよ」

「俺はこんなのも慣れてるから、大丈夫だよ」

「でも、やっぱり目がトロ～ンつしてきてるし」

「うん、ちょっとボーッとする」

「やっぱり救護室に」

「お願い、もうちょっとだけココにいてよ。ねつ？」

どうして連れて行かないんだ。

長谷川は、本当はものすごくきついはずだ。
なんで連れて行くことをそんなに拒むのか。
燈和は、長谷川の頼みを聞かないわけにはいかなかった。
こんな風に話が出来るのも、今だけなのかもしない。
だから…という思いが強かつた。

「ねえ、彼氏君のこと、好き？」

ストレートに聞かれると、答えづらい。
でも、そう言わせて考えてみた。
本当に真田のことが好きなのか。

「嫌いじゃありません。でも…」
「でも？」
「…正直、好きでもありません。もちろん、人としてはかなりいい
人で…」
「やつぱり、そなんだ」
「や、やつぱり？」
「何となくそういう思つてたんだ」

H、エスパー：

もしかすると、真田も気づいているかも知れない。
その前に、燈和自身の行動が表していた。
2人でキャンプを見に来ても、燈和は1人でサインをもらいに行く。
正直、真田よりも選手の方が好き。
それに、知らないうちにいつも長谷川を追っていた。
バッティング練習も、ノックも、移動中も。

やつぱり、燈和は長谷川が好きだった。
世界で1番、誰よりも好きだった。

015 好き、でも辛い

「 好き…」

ダメだ、やつぱり私、現実的な恋なんてできないっ！

燈和は、泣いてしまったかった。
だけど、隣に長谷川がいたから泣かなかつた。
雨の音に、燈和の声は消されていたはず。

長谷川には届いていない。
だけど、ちゃんと言つた。
「好き」と、ちゃんと言つた。

「俺、やつぱり熱あるからおかしくなつかけつたかも」

「えつ…」

初めは、理解不可能だつた。

次第に意識がはつきりして行くなかで、今自分が置かれている状況
を理解した。

といつより、理解しようとした頑張つた。

長谷川は、燈和をギュッと抱きしめた。
肩に当たる長谷川の吐息が熱い。
それからゆっくりと燈和を放した。
顎を自分の方に寄せ、キスした。
あの時と同じように。

違うのは、長谷川がずっと離れなことについ。

燈和は理解しようとしたけど、やつぱり無理だった。
頭が真っ白になつて、何も考えられない。
真冬で寒いはずなのに、ものすごく熱い。

顔が真っ赤なのが分かる。

息が苦しい。

本当に、長谷川は熱がある。

手が熱い。

熱があるから、おかしくなつちゃつたんだ…

されるがままの燈和は、とにかく自分が置かれている状況を整理しようと努力した。

到底、状況を整理することなんて無理。
すぐ真っ白になつて、甘い誘惑に呑まれて。

やつと離れた。

思いつくり酸素を吸う。

顔が熱い。

ほわほわ、そしてボーッとしている。

長谷川の田を見る事が出来ない。

恥ずかしいし、こまだにドキドキしてゐし。

「好きだよ」

長谷川はそつひとこと言つと、大きな手を燈和の頭の上にのせた。
それを振り払うのはできない。
だけど、燈和にも言いたいことはあった。

「…もう、振りまわさないでください」

そう。

今までずっと、長谷川の思わず行動で狂わされてきた。
今のだつて、その気がないはず。

熱があるとは言つても、燈和はかなり困惑していた。

「俺は本気だよ」

「そんな…からかわないでください。本当に辛いですから…」

「俺の目を見て。本気だから」

そう言つて、顔をあげられた。

視線がバツチリと合ひ。

どんどんまた顔が赤くなつていいくのが分かる。

体の力が抜けて行く。

手先が痺れてきた。

なんとか分からぬけど、長谷川の目はいつになく真剣だった。
さつきまでトローンとしていたのに。

こらえていた涙が、一気にあふれだした。

辛い…

燈和には彼氏がいる。

でも、本当は長谷川が好き。

ずっと憧れのままだと思っていた。

その長谷川が今、目の前にいて「好き」と言つてくれている。

夢幻のような現実。

嬉しい思いの反面、かなり辛かった。

いつの間にか雨もやんで、長谷川の熱も引いていた。
だけど、燈和の顔は火照ったままだつた。

その後、燈和は泣き続けた。
本当に辛かつた。

たつた2つしかない選択肢。
それに悩まされていた。

燈和のことを誰よりも思ってくれている真田。
ずっと憧れの存在だつた長谷川。
今すぐにでも、長谷川のもとへ行きたい。
でも、真田には今までよくしてもらつていた。
それに、どうしても嫌いになれない。

その様子を理解したのか、長谷川は小さい紙に自分のメアドと番号
を書いた。

そして、燈和に渡した。

大きな手で頭をポンポンッとすると、そのままランニングを再開し
た。

「どうしよう…」

どうする事も出来なくなつた燈和は、駅に向かつ足どりが重かつた。
誰に相談しよう…

それとも、自分で解決策を見つけ出すか…
ふと頭に浮かんだのは、妃奈乃だった。
メールでは伝わらない気がする。
思い切って電話してみた。

プルルル… プルルル…

『もしもし、燈和?』

「うん、ごめんね。なんか急に」

『いいよ~。どうしたの?』

「…妃奈乃に相談したい事があるんだけど」

『私なんかでいいの? 聞くよ』

「うん、ありがとう。でも、なんていうか… その…」

『今から暇?』

「うん」

『じゃあ、いつものところに集合。じゃ、またあとでね』

「う、うん。じゃね…」

は、話がはやい…

妃奈乃は、こじらへ事にはときぱきとしている。

学校ではボーッとしてる事が多いけど。

とりあえず燈和は、相談できる相手を見つけることが出来た。
でもこれで気が楽になるとは限らない。

あとは自分自身。

自分がどんな答えを出すかによって、変わってくる。

悔いのないように、誰も傷つかないよう…

そういう答えがあればいいのだけど。

電車の中で、燈和はずつと悩んでいた。

駅のホームを出て、数分歩くと待ち合わせ場所がある。
ていうか、学校の敷地内だ。

ちょうどいいスペースが空いているから、暇なときはいつもそこ
にいる。

サッカーも野球も見える場所だから。

妃奈乃是、もう来ていた。

学校に残っていたのかもしぬれない。

「遅くなつてごめん」

「いいよ。燈和の相談聞くの、初めてじゃない?」

「あはは… そうちも。普段考えるようなことないし」

「何にも気にとめてないつて感じだもんね。野球以外は」

ちょっとだけ『野球』という言葉に反応してしまった。
それに気付いたのか、妃奈乃是燈和をベンチへ誘った。

017 妃奈乃に相談

妃奈乃が買つていてくれた紅茶を、ひとくち飲んだ。
現実に引き戻されたような感じがした。

「何の相談か、当ててみよつか?」

「う、うん」

「燈和にとつて初めての、恋愛に関する相談でしょ」

「…うん」

「何があつたの?修司君と」

「いや、そういうわけじゃないんだけどね…」

やつぱり話しづらい。

妃奈乃是、様子をうかがいながら燈和に質問していった。

「修司君のこと、好き?」

「…うん」

「長谷川選手のことのは?」

「…好き」

「じゃあ…修司君と長谷川選手、どっちが好き?」

言葉に詰まる。

本当のことと言えばいいじゃないか。

だけど、燈和自身分からなくなっていた。

「…分からない」

「そつか。今はそれでいいと思つけどな

「うん…」

「燈和は、なんでそんなに長谷川選手のこと好きなの？」

ストレートに聞かれると、やつぱり答えた。「…

どう説明すれば伝わるのか

「…かつここいし、野球すしじく活躍してます…かつここ優しい

「…ねえ、その最後の『優しい』って、なんでわかるの？」

「な、なんでつて…」

「テレビの中じゃそうかもしないけど、現実じゃ分からなによ。

スター選手なんだから

「…分かってる。でも、本当に優しいんだもん

状況を話すか話さないか、すつじく迷つた。

迷つて、迷つて、迷つて…

決心した。

「キャンプの時、ペン拾ってくれたの」

「それだけ？」

「…雨降つてる時、雷鳴つてて…」

「燈和、雷怖いもんね」

燈和は頷いた。

「その時に、大丈夫って言つてくれて…

「言つてくれて…？」

「…頭なでてくれた／＼／

「う、うそつ！？長谷川選手に？」「

「うん」

「あのスター選手に… つていうか、その前の話から凄いと思ひナビ
「その前って？」

「なんでそんなんに長谷川選手と話してんの？」

言われてみれば、すごい話だ。

あの大人気のスター選手と、普通に話している。
助けてもらったり、慰めてもらったり…
運がいいと言つていいのか。

「…アドレス」

「ん？」

「私、アドレス教えてもらつた」

「…えええっ！…ひ、ちょっと、それヤバい…すいすいされるよ、燈和

！」「…

「うん…」

結局、キスされたことは言えなかつた。

そして、どうするかの決断までは至らなかつた。

悩んだ結果、いつするしかなかつた。

「いたん落ち着いて…」

燈和は、学校で真田を呼びだした。

真田も、薄々気づいていたのかもしれない…

「急に呼び出しだ」「めんね」

「いいよ、別に。どうした?」

「うん…」

勇気が出ない。

何と説明すればいいのか。

良く分からない。

順を追つて説明することにした。

「長くなるけど、ここ?」

「いいよ」

初めから説明する。

そしたら、真田も分かつてくれる気がした。

「…長谷川選手、見に行つたじやん。私つて、中学2年のころに初めて見たの」

「…ってことは、入団した時じゃん」

「そう。その時から、サインもらおうとしてたんだけど、最初はも
らえなかつたの」

「人気だつたから?」

燈和はうなずいた。

「チャンスはあつたんだけど、ペン落としちゃつて…」

「それはそれは残念…」

「でも、そのペン拾ってくれたんだ。名前も読んでくれた」

「燈和つて? 難しいのに?」

「うん。難しいって言つてた。その後、結局サインもらえなかつた
んだけど」

「

雨が降り出した時…雨宿りをした時のことを話し始めた。

真田は、その話を真剣に聞いていた。

ウンをつくことはない。

何も隠すことはない。

全部話した。

「…知り合いでいるじゃないだね」

真田はそう言った。

知り合いでいるじゃないって、どうこいつ意味なのか。

燈和には分からなかつた。

でも、燈和は心に決めていたことがある。

「…やっぱり私、長谷川選手が好きなんだ」

「どうしても?」

「うん…」

これが燈和のだした答え。

これ以上なんて、きっとない。

だから… 真田とは別れる。

「理由はよく分かった。でも…別ないと、ダメ?」

うなずいた。

何もかも振り出しに戻して、1から始めた方がいい。

そう思ったから、別れる決心をした。

「ゴメン…」

「…わかった。長谷川が好きならしじつがない。それに、憧れとか

じゃなきゃうだし

「うん…」

「でも、友達でいてよ。ずっと」

「うん」

これが、燈和の出した答えのすべてだった。

手に握られている小さな紙。

それには、長谷川の連絡先が書いてある。

思っていた以上に綺麗な字が、きちんと並んでいる。

学校では、すぐ噂が広まった。

真田と別れた事が。

ただ、長谷川とのかかわりは噂になつていない。

妃奈乃も真田も、誰にも話していないのだろう。少しだけホッとした。

でも、かなり衝撃的な事が起つた。

テレビを見ていると、芸能特集のコーナーで流れた。
聞きたくもないようなこと。

『アナウンサーとプロ野球選手、熱愛か?』

よく見るアナウンサーと…長谷川だった。

燈和は、本当にショックを受けた。

連絡をするか、それともしないか。

悩んでいた。

手に握られている紙を綺麗に広げ、携帯をとりだした。

でも、なかなか番号が打てない。

緊張もあるけど、ニュースを見てわざわざ衝撃的で…

最後の数字が押せない。

その日は、最後まで押すことが出来なかつた。

連絡して、もしつながつたら…なんて言えばいいんだろう?

連絡する意味、それが明確ではない。

押す勇気が出ないのは、そのせいでもあつた。

次の日、また芸能特集で流れた。

昨日の報道は、うそだつたらしい。
アナウンサーを含む数人が、偶然野球選手数人に会つただけらしい。
それが本当なのかは分からぬ。
でも、少しだけ気が楽になつた。

…本当のこと、聞いてみようかな?

かける理由を探していた燈和は、とりあえずこの報道について聞いてみようと思つた。

でも、こんなこと聞いてもいいのかといつも氣持ちはあつた。

最後の1ケタ…8を押した。
すると、つながつた。

『もしもし?』

「…もしもし、燈和です」

『…どうしたの?』

「えつと」

ストレートに聞くのはどうかと思い、とりあえず真田と別れることを言つた。

『…本当に別れてもよかつたの？』

「はい。やっぱり真田君は友達の方がよかつたので」

『そつか。よかつた』

よかつたの意味がどういった事なのか、やっぱり分からぬ。この前は好きと言つてくれたのに、報道があつたから…

「あの…すつじぐへ聞きづらこんですけど、いいですか？」

『うん、いいよ』

「テレビで報道されたこと、本当にですか…？」

思い切つて言つた。

でも、ちょっとだけ言つた事を後悔している。

「…でも少し気まずくなつたら…」

『もしかして、妬いてくれてる？』

予想外の答えが返ってきた。

もつと返事に詰まると思つていたのに。

「や、妬いてなんか……」

『そり、残念だなあ……』

「じゃあ、アレッて」

『いわゆる誤報つてやつだね』

安心した。

長谷川からその言葉が聞けた。

不安が全部吹き飛んだように、心がすつきりした。
でも、やっぱりまだモヤモヤする」とはあった。

いつも長谷川が言う言葉。

燈和に対して、からかっているのか。

それとも、本当なのか。

「…あの、もう一つだけいいですか?」

『うん。何?』

「長谷川選手つて…どうですね。やっぱり」

『な、なんで?』

「いつも私をからかって、なんか楽しそうに見えるから…

『からかって?えつ、俺からかってたの?』

「意識なくからかってるあたりなんか…純粋にどうです」

『いやあ、からかってるつもりは…』

「じゃあ、なんで私の気持ち、振りまわすんですか？」

『えつ？』

本当に長谷川は気付いていないみたいだった。
本当にどうなのか、それとも…

「本氣で私のこと、好きなんですか？」

思い切った発言。

燈和は、言った後じわじわと顔が赤くなつていつた。
そこまで言つてしまつてはなかつたから…

『俺は、本氣だよ』

『…やつぱり、言ひられません。いろいろと』

『じゅつたじらじでくれる？』

『…じゃあ、お願ひ聞いてください』

『うん』

「どんなに無茶なことでもいいですか？」

『いいよ』

燈和は、考えた。

無茶でもいここと言つたからこま、すこものを…と。
候補は2個ある。

どっちにするか迷つた。

そして結局…

『明日の試合、ホームラン打つて下さー』

『明日の試合ね。うん、頑張つてみる』

「それともう一つ。ヒーローインタビュー受けたみたいな活躍してく
ださい』

『分かつた』

2つともお願いした。

もし、本当にお願ひを聞いてくれたら…っと考えた。
でも、こんな急に無茶な出来ないはず。

といつより、ホームランとかヒーローインタビューとか、意識した
ら出来ない。

無意識のうちに活躍するのがプロ。
燈和は、叶わないと思っていた。

試合開始。

燈和はテレビの前で見守っていた。

お茶を片手に、テレビの真ん前に座っていた。

試合は、投手戦だった。

両チームともヒットが打てない。

長谷川の第1打席は、空振りの三振だった。

でも見ていて分かった事もある。

いつもよりもバットを振る勢いがすごい。

解説者も言っていた。

本当にホームランを打とうとしている。

第2打席、第3打席は四球で出塁。

第3打席で出塁した時は、盗塁を試みた。

だけど、失敗した。

試合はそのまま〇対〇で延長戦へともつれこんだ。

延長10回、両チームとも3者凡退。

延長11回、やつとヒットが続いたものの得点ならず。

相手もそうだった。

延長12回。

最終回までもつれた今日の試合。

相手が表に攻撃をしている。

ここで気の緩みが出たのか、チームの選手にエラーがついてしまつ

た。

ピッチャーも不安定になつて、次々ヒットを許した。

2失点。

これは大きな失点となりそうだ。

その回の攻撃は、その2失点だけで終わつた。

裏は、5番打者から始まる。

今日ノーヒットの選手で、今回も空振つた。

6番打者は、粘つて粘つて四球。

7番打者は、初球の甘く入つたカーブをセンター前に打つた。

1アウト1、2塁。

そこで8番打者、長谷川が出てきた。

初球は見逃して、1ストライク。

次も見逃して2ストライク。

これじゃ、もう後がない。

続く第3球目はファール。

4、5球目もファールにした。

でもまだ2ストライクノーボール。

第6球目、相手バッテリーのミスが出て、ランナーは2、3塁へと変わつた。

第7球目、ついにこの瞬間が来た。

甘く入つたカーブ。

7番打者と同じコースだつた。

大きく振つたバットの芯にボールが当たる。

そのまま大きく弧を描いて、3階席まで飛んで行つた。

：3ランホームラン。

逆転、サヨナラ勝ち。

燈和は、テレビの前で固まつていた。

もちろん、ヒーローインタビューは長谷川だった。

大歓声の中、嬉しそうな表情でインタビューを受けている。

そして、最後のひとことでは、こう言った。

『昨日電話してくれた人に、証明できたんじゃないかなあつて思つてます』

証明どころじゃないって

長谷川は、本気だった。

それが十分すぎるほどに云わってきた。

もう分かった。

本当に好きでいてくれている。

燈和は、何よりもうれしかった。

次の日、テレビではその発言が意味深だと取り上げられていた。

『誰に対する発言だったのか?』

『例のアナウンサーに対するコメントだった!?』

散々だった。

真実を知っているのは、燈和と長谷川だけ。

マスコミがそう書つのは、このことを知らないだけだ。
ところが、もしこのことを知ったならば…
きっともつとひどく取り上げられるだろう。

長谷川の相手が高校生。

歳の差が11歳。

…相當言われる。

…どうすればばれないんだろう?

いらない不安がどんどん大きくなっていた。

「燈和、どうだった?」

「うん、ちゃんと本当のことと言つた」

「それで?」

「真田とは、本当に別れた。そして、長谷川選手におとこ連絡したの」

「そしたら?」

「お願い、本当に実行してた」「…ちょっと待って。それって、昨日のインタビューオーの時に言つてたこと?」

「うん。あれ、たぶん私に言つてたんだよ」

妃奈乃是言葉がでなくなつていた。

本当にすゞじ事が起つてゐるのは分かつてゐる。

「燈和、これから大変だよ?」

「うん…」

「でも、応援するから。頑張つてね」

「ありがと」

（　）

「携帯、鳴つてるけど…」

「ん?…あ、私のだ」

表示画面を見ると、長谷川だった。

それを知つて、妃奈乃是教室へと戻つて行つた。

「もしもし?」

『もしもし、長谷川です。昨日、見た?』

『見ました!…す』かつたです』

『ありがとう。…これで分かつてくれた?』

『はい』

『本当に、好きだから』

「…」

『俺と、付き合つて下さい』

「…はい」

『よかつた〜つ。ここで嫌とか言われたら、相当ショックだったかも』

長谷川は、笑いながら言つた。

『本当に私でいいんですか？ただの高校生だし』

『俺が入団した年のキャンプ、来てたでしょ？』

「はい、行きました」

『あと、実はファンレター書いててくれたでしょ？』

『えっ！読んでくれたんですか？』

『もちろん。来た人の分、読むんだけどね。名前難しうってイメージが強かつたから』

「名前…」

名前に感謝だ。

『ホームランボール、とつたんでしょ？』

『まだ家にあります！！』

『なんかさあ、純粹に野球好きそうだったし。優しかったし、理想の人つて感じなんだよね』

理想の人…

その言葉が、何よりもうれしかつた。

『私も、長谷川選手がすつゞく理想なんですね…！』

『ありがとう。そう言つてもらえると、すつゞい嬉しい』

電話の向ひで、長谷川は少し黙っていた。

023 アルバイト

憧れだったはずの長谷川が、なんと彼氏に！？
高校生時代に、見事叶った恋。

だけど、今も昔もごく普通、大学生になつた藤井燈和。
勉強を頑張つて、結構いい大学へ入学できた。
自分の将来の夢に、一番近かつたのだ。

燈和の将来の夢は、雑誌の記者だつた。
それも、スポーツ雑誌。

女性向けのスポーツ雑誌を初めて見た中学2年。
自分もこんな記事が書きたい、そう思ったのだ。

「ひいちゃん、これからバイト？」

「うん、バイト」

「そつかあ…合コンのメンバー足りないから、誘おうとしたのに」

「ゴメンね。他あたつて」

「わかった。じゃ、今度誘うからねっ」

「私、彼氏いるしーっ」

「えつ！… そうなの？」

「うん」

「いつも彼氏らしい人見ないから、てつきりいないかと…」

「…遠距離恋愛だからね」

「そなんだ～。大変なんだね」

大変どころか…

言いそうになつたけど、口を閉じた。

まだ誰も知らない。

だから、燈和が誰とも付き合つてないというイメージが強いのだろう。

この前も、ある人に告白された。
もちろん断つたのだが。

中学生時代はわりと体格がよかつた燈和。

高校生時代に身長が少し伸び、髪を長くのばしていた。

大学に入つてからは、見事に瘦せた。

そして、髪を肩の長さまで切つて、幼さが増した。

みんなが言うには、可愛い系だとか。

自分がモテているのに気づいていない燈和。

その天然なユルいキャラが、人気の秘訣でもあつた。

バイトはファミレスの店員。

その時間、時給が結構良かつたのだ。

それまでしてお金をためる理由。

それはもちろん、試合を見に行くためだつた。

「ありがとうございました」

食器洗いも早く、客への対応もいい。
評判がかなり良かつた。

正式な社員にならないか、とも言われている。
でも、それが夢というわけじゃない。

あくまで、燈和の夢はスポーツ雑誌の記者。
その夢を断念するようなことはなかつた。

ディスプレイには、『長谷川智行』と表示されていた。
メールが届いたのだ。

『チケット、取つておいたよ。

› 空港に迎えに行けたらいいんだけど…

› 試合だから行けないんだ。

› チケットは送つておくね。』

休み中に行くと言つたら、チケットをとつてくれた。

人気の外野指定席だ。

応援が思いつきり出来る。

みんなに混じつて、大声を出そつと思つている。

準備、始めないとなつ

航空券は1か月前から予約していた。

だから、あとは行くだけとなつた。

貯めたお金で。

自分で頑張つた『褒美みたいで、ちょっと嬉しかつた。

「財布…チケット、航空券…ユニフォーム…タオル…」

朝早くのうちに最終確認。

昼の便で行く。

今日はナイターゲームだ。

燈和は、あと2回確認した。

忘れっぽい性格だから、そうでもしないとかなり心配。

特に、財布は重要。

チケットも航空券も入っている。
手持ちのバッグに入れた。

飛行機の中では、眠っていた。

夜遅くまで勉強して、準備して…
疲れていた。

でも、試合が見れるならそれでいい。

そう思えることが、燈和のすごいところ。

他の人からは、ちょっと変な目で見られる事もあるけど。
そしてそこを気にしない。

だから現に今、こうやって1人で試合を見に行くことが出来ている。
快適な空の旅を…

40分ほどで終えた。
ぐっすり眠れた。

今度は空港に着いてからが大変。

方向音痴だから、地図をよく見ないと動けない。
もちろん、空港の中も。

今自分がどこにいるのかさえもわからなくなる時がある。
正直、1人旅は危なかつた。

それでも行く。

燈和はとにかく試合が見たかった。

荷物をとつて、空港の外にいたタクシーに乗る。

そしてそのまま、泊まる予定のホテルに向かつた。

予想以上に安くでとれたホテルは、思っていた以上に広かつた。
ビルが立ち並ぶ、都会の景色。

それも新鮮だつた。

荷物を置いて、時計を確認した。

もうそろそろ行かないと、人がどんどん多くなる。

燈和は、まず長谷川にメールした。

『無事、ホテルに到着しましたっ！

今から行きます。燈和』

「送信一つ」

部屋のかぎを閉めて、ロビーに預けた。

そして、駅まで歩いて行つた。

意外と近い。

でも、駅の中が広かつた。

予想をはるかに超していて、迷いそうになつた。

普通に15両の電車も来るし、線路がたくさんある。

田舎に住んでた燈和にとっては、ちょっと難しい光景だつた。

切符を買って、ホームで電車を待つた。

人が多くて、良く分からなくなる。

でも、徐々に周りにユニフォームを着た人が増えてきた。
応援に行く人たちらしい。

おなじ背番号22のユニフォームを着ている人もいた。
まだ燈和はユニフォームをバッグにしまっていた。

あとで着よつと

025 ひとり観戦

電車に乘ると、他の両にもファンがいるのが見えた。そして、燈和が乗る前から乗つてきていた人もいた。

みんな観戦なんだあ…

こんなことは初めてだつた。

でも、どこか安心する。

同じものに熱中している人が、周りにたくさんいる。仲間がたくさんいるようで、ホッとした。

結構、長旅になつた。

とは言つても、せいぜい30分ぐらい電車に乗つていただけ。途中乗り継ぎもしたけど。

電車に揺られる感覚が残るなか、ようやく球場についた。人がたくさん並んでいた。

その列の中に、燈和も溶け込んだ。

ユニフォームをバッグから取り出し、着た。

いかにも、これから応援します！つて感じだ。

席は、かなりいいところが取れた。

選手が練習をしているのも見た。

長谷川もいる。

外野席の前でランニングをしているとき、燈和に気づいたらしい。目が合うと、にっこりと笑った。

「今、長谷川選手が笑ってくれたよね？」

「「つからに笑ったのかなあ？」」

そんな声が後ろから聞こえてくる。
やっぱり長谷川は人気なのだ。
いくつになつても。

試合開始。

応援がすごくて、地面が揺れていのように感じる。
燈和も大きな声で応援した。
応援歌も歌つたし、フリまで覚えてやつている。
みんなに負けないくらい、ファンに溶け込んでいた。

長谷川の時は、とくに大きな声で応援した。
活躍してほしいってこともあるけど…
やつぱり『彼氏』だから。
『彼氏』という響きに、まだ完全には慣れてないけど。

長谷川は、猛打賞。

そして、守備でも活躍した。

他にホームランを打った選手と、今日の先発投手。
3人でヒーローインタビューだった。
最後の最後まで、燈和は球場にいた。

球場を後にする前に、長谷川にメールした。

『カツコよかつたです！！

>今から球場を出ます。燈和』

送信すると、すぐ返事が返ってきた。

『明日休日だから、送つて行へよ！』

› ちょっと遅くなるけど…

› それでもいい？』

全然いいっ！！

長谷川に会う事が出来るだけでもうれしいのだから。

『いいです！

› どこで待つてねばいいですか？』

『球場の駐車場があるんだけど…

› とりあえず、駐車場の出口で待つてて』

『分かりました』

言われた通り、駐車場の出口へ向かった。

車が数台、前を通つて行った。

あと残つて いる車は、数えられるだけ。

たくさん止めてあつたのがウソみたいだった。

待つてゐる時間はかなり長かつたはず。でも、全然苦じやなかつた。

遠くから白っぽい車が近づいてきた。

目の前で停車すると、窓が開いた。

「『じめん、遅くなつた』

ゴーフォームや練習着姿とはまた違つ、白いTシャツ姿の長谷川だつた。

細身な体とは違つて、筋肉質な腕が見えている。燈和のツボだつた。

助手席に座り、シートベルトをしつかりとした。

いつもと違う長谷川が隣にいると、なんか新鮮だつた。初めて会つた時みたいにドキドキする。

試合の後シャワーを浴びたのか、シャンパーの香りがした。

「移動、大変じゃなかつた?」

「全然大丈夫です!なんか、楽しかつたし」

「それならよかつた」

笑うと見える真っ白な歯。

それが爽やかさを引き立たせていた。

日焼けして、またいつそつ白が似合つ。

ファンのみんなが言つよつに、まわに『爽やか王子』だ。

「ねえ、これから時間ある?」

「はい、あとホテルに戻るだけなので…」

「東京タワー、見に行こつか」

「ホントですか!すつごい見に行きたいですっ!!」

夜はライトアップされている。

東京タワーには、小学6年このころに1度行つたつきり。
それも、曇りの日の昼間に。

晴れた日、そして夜は初めてだつた。

田舎人からすると、憧れの観光地なのだ。

疲れて眠いはずなのに、すっかり目が覚めてしまった。

その前に、長谷川は大丈夫なのか?

「あの…疲れてるんじゃないですか?」

「俺? 大丈夫だよ。どうせ家に帰つても、テレビ見たりゲームした

り」

「へえ~」

「ま、普通の人つてことだよ」

確かに、それを聞くと普通の人。

もつと、練習したりしてゐるのかと思っていた。
それより…

「家つて…寮じゃなかつたんですか

「うん。2年目で寮は出たよ」

「知らなかつた…」

また1つ、知らないことを知ることが出来た気がした。

プロ野球選手という遠い存在。
でも、野球以外では普通の人。
一般人と、何の変わりもなかつた。

東京タワーから離れた駐車場。

そこに停めないと、周りはダメらしい。

前回はバスでタワーの下まで行つたから、知らなかつた。

「ちょっと歩くけど」

「大丈夫ですよーまだ元気ですっ」

チケットを買って、早速展望所へ上がった。

もうすぐ営業時間も終わるのに、人は多かつた。

「どうあえず、ギリギリまでいようか」

「はいっ！」

燈和は、子供のようにテンションが上がっていた。長谷川からすると子供なのだけど。

ガラス張りのところでは、ジャンプしてみたり…本当に田舎人って感じだった。

でも、おんなじことをしている人がいたからよかったです。

「こんなに綺麗だつたんだあ

「来たことあるの？」

「はい、小6くらいの時に。でも、その時は畳つてたんですね。畳間に

だつたし」

「そりなんだよ。じゃあ、ライトアップとかも初めてなんだね」

「はい、だからなんかテンションあがっちゃつてて」

「いいよ。見てても楽しい」

燈和は、持っていたデジカメで景色を撮つた。
ぐるっと1周まわつていると、プリ機を見つけた。

「これ、撮りません？」

「プリクラかあ。俺、撮つたことないんだよね
「じゃあ、なおさらです！」

2人で料金は割り勘。

初めのうち長谷川は慣れてなくて、すぐ表情がかたかつた。
しだいに、慣れてきたようだつた。

「う～ん、やつぱり表情硬いですよ

「だつて、慣れないもん」

「初めてつてのには驚きました」

「そんなんにみんな撮つてる？」

「私は、遊びに行く時毎回撮つてますよ」

プリクラを2人分に分ける。

それは器用な燈和担当。

「はい、どうぞ」

「ありがと」

「やつぱり表情硬いつ」

「そこで笑うなよつ

何よりも楽しかつた。

デート…そう言えば、初めてだ。

ずっとメールや電話だけだつたから。

キャンプの時に会つくらいで、2人でどこかへ行つたりするなんて…

燈和にとつては夢のまた夢だつた。

幻みたいに思える。

「もうそろそろ時間だから…降りようか

エレベーターで降りるときのふわっとした感覚。

飛行機の中みたいで、燈和は楽しかった。

1階へ着くと、外へ出た。

外にはたくさんのカップルがいた。

なんでこんなにたくさん…

東京タワーには、伝説がある。

『消灯の瞬間を恋人と一緒に見ると、幸せになれる』

燈和はそんなこと知らない。

長谷川は…知ってるのか分からぬ。

「消灯の瞬間、もちろん見たことないよね？」

「東京タワーって、消灯するんですか？」

「そこから…」

「全然知らないんで…すみません」

「0時になると、消灯するんだって」

「へえ…」

上を見上げると、空高く輝いている。

この光が消えるのを、燈和は想像できなかつた。

0時まで、相当長い時間だと思っていた。
でも、会話が楽しくてあつとこう聞だった。

「あと2分くらいで消灯の時間だ」

「これが消えるなんて…想像できない」

燈和は、頻繁にタワーのつぶんを見上げていた。
本当に想像できないのだ。

紅白歌合戦の時、白くライトアップする瞬間でさえ驚いたのだから。

カウントダウンが始まった。

近くにいたカツプルは、あと何秒か数えている。

「3、2、1…」

瞬間の出来事だった。

今まで明々していた周囲も、すっかり真っ暗。
本当に消灯した。

燈和は、ポカーンと空を見上げていた。

「驚いた？」

「まさかホントにパツて…」

「すごいですよ」

「すごい…」

空いた口がふさがらないといった様子だ。
その様子を見て、長谷川は笑った。

「やつぱり子供みたい」

「それ言わないでくださいよ……学校でも言われてるんで

「やつぱり？」

「やつぱりって……ヒビイツ」

「じめんじめん。なんか、子供みたいに純粋だなーって」

学校でもみんなに言われる。

何に対しても、子供みたいだつて。

無邪気に笑つて、なにかと純粋で。

それがどういう意味なのか、よく分かっていない。

燈和は、子供みたいと言われるのが褒め言葉だとば、全く思つていなかつた。

駐車場まで、あつといつ聞だつた。
まだ車の通りは多い。

いつもなら、こんなに多くない。

もちろん、それは燈和の住んでいるとこが田舎だからだけど。
また助手席に乗つて、シートベルトをしつかりとした。
長谷川が運転席に乗る瞬間、ふわふと甘く香りがした。
さつきの、シャンプーだろう。

それだけでドキッとする。

「遅くまでつき合わせて、「メンね」

「いや、ホント楽しかつたですっ！ ありがとついでございました」

「やつ？ 楽しかつたならよかつた」

車の中でも、会話は盛り上がった。
チームの選手の裏話が聞けたり…

ホテルの前に到着。

やつぱりいつ見ても、都会の中に建っているホテルは迫力がある。
夜は、電気がついてる部屋とついてない部屋の明るさの違いが面白い。

絵が出来ているみたいだ。

「ありがとうございました！」

「どういたしまして」

シートベルトをはずして、ドアに手をかけた。
すると長谷川が、燈和の手首をぐつと掴んできた。
思わず、燈和はかたまってしまった。

「ねえ……キス…しても、いい？」

そう言わると、今までとは違つドキドキが襲つてくる。
手先が痺れてきた。

「クンツ／＼／

燈和が頷くと、長谷川の大きな手が燈和の頬をおおつた。
ゆっくりと唇が近づいてくる。
頭がぼーっとしてきた。

「／＼／＼／＼

触れた瞬間、燈和は頭が真っ白になつた。

今までとは違つて、芯から痺れてくる。

燈和は、力の入らない手で長谷川のシャツをつかんだ。

もう顔は真っ赤。

それくらいわかっている。

ほのかに、甘いシャンプーの香りがする。

それが、さらに燈和の頭の中を真っ白にさせた。

029 メール

好きだけど、やっぱりどこか遠い気がする。
相手はプロだし、人気投票N.O.・1の選手だ。
ごく普通の大学生である燈和にとっては、遠く大きな存在なのかも
しれない。

部屋でも頭は真っ白のまま。
全く慣れないあの状況。
今もまだ、手先は痺れたままでいる。
テレビをつけても、ジュースを飲んでも。
いつもよりも痺れは切れなかつた。
結局、寝付いたのは2時半ごろ。
それまでは、なかなか眠れなかつた。

（　）

携帯が鳴る音で目が覚めた。
メールが届いたらしい。
ふと時計を見ると、もう9時過ぎだった。
誰だるつ……？

表示画面のライトをつけると、そこには『長谷川智行』と書いてあ
つた。

一瞬だけ、ドキッとする。

やつぱり、まだこの感覚は慣れてない。

今でも夢みたいだと思つてゐる。

携帯に長谷川の名前が表示されるなんて。

『おはよーっ、起きてた?』

›聞きたいことあるんだけど…

›いつ帰るんだっけ?

›昨日聞くの忘れてたからさ。』

帰るのは明日だ。

今日は、とりあえずどこかをぶらぶらしようと考えていた。
特に予定らしいものがないから。

『おはよーっ』さこです

›帰るの、明日です。燈和』

『じゃあ、どこか行く?

›予定があるなら別にいいけど…』

もし仮に予定あつても、絶対どこか行くつて…!

『予定、全くないです(笑)

›でも、疲れてないんですか? 燈和』

『俺は疲れない人だから、心配いらないよ!』

›どこか行きたいところ、ある?』

ち、超人…行きたいところかあ…

『行きたいところ…

›あんまり知らないから、よくわかんないです

›すみません。燈和』

『そっかあ…じゃあ、俺の行きたいところでいい?』

『はいっ! -!

›行きたいところって、どこですか? 燈和』

『それは内緒だよ

›迎えに行くから、10時半ごろでいい?』

『内緒だよ』 つて、可憐すぎつー!

『いつでもOKですよー

›じゃあ、待つてます。燈和』

燈和は、楽しくて仕方がなかつた。

もともと長谷川はかつこよくて可愛い。
でも、試合中は断然かつこいい。

こういう可愛い一面は、初めてだつたかもしれない。
それまた新鮮で、嬉しかつた。

030 ショッピング

昨日よりかは女の子らしさ格好のはず。

でも、やつぱり動きやすさ第一に考えた組み合せだった。
ショートパンツにTシャツ…まあ、ここは触れないでおこう。

準備を済ませて、1階のロビーに鍵を預けた。
クーラーが利いていて、外の暑さとは大違い。
そんなロビーを出ると、本当に真夏だった。

まだ来てないし…中で待つてた方が、断然いいよね?

ロビーにもどると、スーツと涼しかった。

（）

『来たよ』

メールが届いてから外へ出ると、昨日の車があつた。
でも、一瞬目を疑つた。

長谷川…なんだけど、いつもと全然違つ。

「メガネ…だ」

黒縁の眼鏡をかけただけで、別人のように見える。

カッコいい、その言葉が一番当てはまる。

「“コメン”、遅くなつて。乗つて」

長谷川は長谷川。

でも、やつぱりこつもと違つ。

今日もやつぱり、すつじくべキドキしてゐた。

「あの……どく行くんですか?」

「ん?え?とねえ……簡単に言つと、今から買ひ物に行へよ」

「買ひ物?」

「そう。持つてきてないだら?」

「何をですか?」

「まあ、行つてのお楽しみついで」とこしておこで」

長谷川は、どくかもつたいぶつたような言い方をしてゐる。燈和は、気になつて仕方がなかつた。

車で走ると、大きな店が立ち並ぶところへ着いた。いろいろなビルが立ち並ぶところとはまた違つ。

子供からお年寄りまで、たくさんいる。

駐車場を探すのに一苦労した。

とりあえず、停めたからよかつた。

店の中は、やつぱり涼しかつた。

涼しいをちょっと通り越して、寒かつたかもしれない。

たくさんの服、バッグが並ぶ中、長谷川は何かを探していた。

「何探してゐんですか?」

「ん?とねえ……売り場なんだけど……あつ、あつた!—」

長谷川は背が高いから、遠くまで見える。

燈和が見えない売り場まで、見えていたみたいだ。
どこへ進んでいるのか、全く分からなかつた。

店の端っこの方に、夏祭りコーナーがある。
そこの『浴衣売り場』を探していたらしい。
いろいろな浴衣がそろえてある。
田舎の店とは大違つた。

「今日、花火大会があるんだ」
「花火大会!? ホントですか!」
「それに行きたいなーって思つてたんだけど、どうせなら浴衣で行
きたいでしょ?」
「でも……」

持つてきたお金が、危ない。
もしかすると、底をついてしまう。
悲しい現実だ。

「大丈夫だよ。俺が買うし」
「でも、高いし……」
「平氣だよ。一応、プロだから」

なるほど、プロだから持つてるってわけかあ……

と、燈和は解釈してみる。
どれにしようか、悩んだ。
でも、なかなか決まらなかつた。
優柔不斷な性格が、ここで出でてしまつ。
そこで、いい事を思いついた。

「好きな色、教えてください」

「お、俺の？」

「はいっ」

「好きな色は青だけだ」

「青かあ…」

青の浴衣を探した。

結構、たくさんあるものだ。

長谷川は、燈和がなんで好きな色を聞いたのか分かつていなかつた。いきなり青の浴衣ばかり探し始めた燈和を見て、ようやく気が付いた。

「好きな色は青だけど、黒もいいな」

「黒？」

「浴衣の色、決まらないんでしょ？ そしたら、黒がいいなー」

黒の売り場を見た。

青の浴衣よりも、柄がたくさんある。

燈和は、黒のコーナーから探し始めた。

031 浴衣姿の2人

花の模様がついたのを選んだ。

セットで全部そろえてもらつた。
かなりの金額のはずだ。

本当に申し訳ないと思つてゐる。

「あ、ありがとうございます」

「いやいや、俺が連れてきたわけだし。ねつ？」

その後は、まず昼ご飯を食べた。
さすが現役選手。

それはもう、よく食べる。

燈和の3倍くらい、普通に食べていた。
なんと、昼食代もおごってくれた。

「人が多くなる前には行きたいからねえ……」

長谷川はそう言つと、駐車場へ向かつた。

話を聞くと、その花火大会はかなり大きいものらしい。
有名な花火大会で、各地から人が集まるという。
そして、もう一つすごい事を聞いた。

「俺のすんでるところ、かなり近いんだ」

花火大会の会場の近くにあるアパートに住んでいふと言つた。

さすが1人暮らし。

プロ野球選手とはいえ、話を聞くと小さめのアパートだ。

車で向かった先は、長谷川の住むアパートだった。
かなり綺麗なところで、建つたばかりらしい。

「着替えないといけないでしょ？」

そう言つて、部屋にあげてくれた。

必要最低限の生活用品がそろつている。

ただ、本当に必要最低限だけ。

長谷川が自分の部屋にいるとき、洗面所で着替えた。

あまり慣れてなかつたけど、親に教えてもらつた事がある。
結構すんなりと着れた。

鏡を見ると、髪が普通すぎる事に気付いた。
鞄の中から、ピンとゴム、そしてくしを取りだした。
手先だけは器用だから、簡単に髪を結い上げる事が出来た。
やつと浴衣にあつ格好になつた。

洗面所を出ると、長谷川も浴衣を着ていた。
ただ、着るのに苦戦している。

その姿がとても可愛かつた。

「手伝いましょうか？」

「ひ、うん…慣れてないからなーつ、やっぱ難しい」

そう言いながら長谷川は顔をあげた。

そして、なぜかかたまつた。

「ど、どうかしましたか？」

「…い、いやあ、ね。…か、可愛いなーって
「／＼／」

照れながら着れてない方が、よっぽど可愛いって…！

燈和は、かなり照れていた。
そりやあ、好きな人から面と向かつて『可愛い』と言われたのだから。

いくらそれがお世辞でも、嬉しそう。

長谷川も無事着終わつて、2人は会場へ歩いて出かけた。
相変わらず、長谷川は黒縁メガネをかけている。
それがまた、浴衣と似合うこと。
燈和のストライクゾーンだった。

032 食べ盛りの子供

そういうえば、と燈和は思った。

今隣を歩いているのは、超有名人。

プロ野球選手だ。

こうやって普通にしていて、大丈夫なのか？

「んー、大丈夫なんじゃない？普通の人間なんだし」

ちょっと投げやりな答えが返ってきた。

本当に大丈夫なのか…？

人が多く集まっている。

すぐはぐれてしまいそうなほどになってしまった。

さすがは有名な花火大会。

田舎では考えられないほどにぎわいだった。

「はぐれるなよ」

長谷川が優しい声で言った。

燈和はもう、どうかなってしまいそうなほどドキドキしていた。

頼りがいある言葉を、優しそうに言う。

そのギャップというものに、グッと心をつかまれた。

普段着なれない浴衣。

やつぱり、どこか勝手が悪い。

でも、なんか気分は上がっている。

花火大会といつたら、夏の代表的な行事だ。

さすがに都会は、私服の方の方が少ない。

雰囲気ていなものにこだわっているわけじゃないけど、なんかいい。着心地の問題より、今は雰囲気の問題なのかもしれない。

「ちょっと時間あるけど、何か食べる?」

「でも、結構並んでますよね…」

田舎ではそこまで並ばない…

「そう?これ、普通なんだけどな」

「」、「これが普通、ですか」

「行列できて、在庫無くなることだってあるからね」

「ほお…」

違ひが大きすぎる。

ちょっと頭がくらくらしそうだった。

都會は、そういう所なのか…

燈和と長谷川は、タコ焼きだのクレープだの、ちゃんと並んで買つた。

そして、河川敷のまだ人がそこまでいな」ところで食べた。

「」、「かなり綺麗に見えるんだけどね。人があまり少ないや」

「これで人が少ないんですか…」

「やっぱり違うんだね。ここじゃ「普通なんだよ

「すごい違ひ…」

隣でおいしそうにタコ焼きを食べている長谷川は、子供のよつだつ

た。

いろんなものに興味を持つていて、田代がおひいきしている。
そして、食べざかり。

食べないとダメなのは分かっているけど。

「これ、いりますか？」

「何で？ 食べないの？」

「いやあ……なんか、食べてるといつて見ると、幸せそうだなーって思つて……」

「わうっ…まあ、食ってる時つて幸せだけじね」

最初は遠慮していたけど、長谷川は燈和の分のタコ焼きまで食べた。
そしてクレープは、燈和が半分しか食べてない時に食べ終わつてい
た。

何もかもが早い…やっぱ私よりも子供っぽいんじゃない？

11歳差あるとは思えない。

長谷川は、もうすぐ30歳だ。
年齢とは、分からぬものだ。

「もう言えばまあ…ずっとと思つたこと、書つていい?」

「はい、いいですけど…なんですか?」

「何で敬語なの?」

「へつ?」

「へつ?」

初めて気づいた。

燈和は、ずっと長谷川に対して敬語で話していたのだ。

普通付き合つてこらのなら、タメでもおかしくないはず。

「それが話しやすければいいんだけど。なんか、無理してるとかじやなくて…気付きました」

「い、いや、無理してるとかじやなくて…気付きました」
「やっぱり、そだとは思つてたけど。俺からのお願い、聞いてくれる?」

「はい…」

お願ひって…今までされたことないよね…なんだらう?

「普通に会話したいなつ」

「へつ?ふ、普通に会話したい…つてのがお願いですか?」

「うん。なんか敬語使われると、遠い存在つて感じがするから」

確かにそうだ。

プロ野球選手として今まで見てたのだから、彼氏とう存在にな

つても敬語を使ってきた。

もちろん、燈和よりも年上なわけだし。

ただ、長谷川がそう思つてたとは知らなかつた。

「普通に…」

「ダメ? もし、敬語の方が話しやすいなら

「じゃあ、これからは敬語、じゃなくする…」

「どこかぎりがない。

でも、初々しい感じがしていいのかもしない。

長谷川の目にどう映つていいのかは、全く分からないけど。

「…やつぱ、今日こつもと違つて可愛いや。まあ、こつも可愛い

けどね」

「なつ／＼／＼

「めつちや可愛いつ」

そつ言つて、燈和を優しくなでた。

やつぱり好きで仕方がない。

彼氏という存在になつても、誰かに取られそうで怖いと思つ事がある。

だから想いはどんどん大きくなつていいく。

長谷川の笑顔も、声も、優しさも…

すべてが好きだからこそ、不安になつていいくのかもしない。

ずっと傍にいてほしい…

そう思うようになったのも、それが原因かもしない。

「…私、大学卒業したら絶対こつちに来る

「ん?」

「ずっと、支えていたいつ／＼／＼

顔を真っ赤にしながら言つ燈和。

その様子を見て、長谷川は少し驚いた。

そして、嬉しかつた。

「俺も、ずっと傍にいたいな

タイミングが良すぎる。

長谷川が言つた後、すぐ花火が打ち上がつた。

ピンクやオレンジ、緑や青。

真っ暗な空に打ち上がる光は、とても綺麗だった。

燈和は、学校で男女問わずの人気になっていた。
世話好きで、おつとりしてゐるのに野球好き。
しかも、かなりなファン度。

そのギャップがおもしろくて、いいらしい。
そのためか、よく告白されるようになつていて。
でも、全部断る。
それはもちろん、長谷川という存在がいるから…

「…付き合つて下さい」

「ありがとう。でも…私、彼氏がいるんだよね」

今まで彼氏の存在を男子には明かしていなかつた。
初めてその存在を教えたのは、同じ野球ファンの人だつた。
いつも優しくて、話しかけてくれて…おもしろい人。
でもやつぱり、長谷川より上の人はいない。

憧れから理想、そして今は彼氏。

夢のような事が自分に起こつていて、毎日が楽しかつた。
でも最近、長谷川は不調だ。

守備には問題ないけど、バッティングがどうも悪い。
だから、代打で途中から出場することが多くなつた。

野球がない日、長谷川からメールが来た。

それも、とても心配な内容だった。

『俺、怪我してたみたい…

♪だから2週間くらい試合に出られなくなつた』

何と返事を打つたらいいのかが分からない。

球団のホームページに情報が載る前に、燈和に報告してきた。後から知ったのは、怪我と同時に疲労がたまつて体調を崩したという事。

心配な思いは募りに募つて…

燈和を行動へと移させた。

急いでチケットを手配して、準備をして飛び立つた。自分から支えてあげると言つたのだ。

長谷川が不振の今、支えられなくてどうする。

こんな今こそ、支えてあげなくちゃいけないんじやないか。

プルルル…

『もしもし?』

「もしもし、燈和だけど…」

『どうした? 何かあつた?』

「今、家にいる?」

『うん、いるけど』

「じゃあ、今から行つてもいい?」

『えつ、来てるの?』

「うん。だつて…心配なんだもん」

『…ありがとう。ずっと家にいるから、いつでもいいよ』

「わかった。あと一時間くらいで着くと思うから』

『了解。気をつけてね』

友達にはわけを話した。

もちろん、相手については話していない。

体調崩したみたいだから行つてくる、とだけ言つた。

なんとなく状況を把握したみたいで、背中を押してくれた。

自分は周りの友達に支えられている。

自分は誰かを支える事が出来るだろうか。

長谷川を、支えて行くことが出来るだろうか。

まだ分からないことだけど、だからこそ今支えてあげないと。

長谷川のためにも、自分のためにも。

ピーンポーン…

ガチャツ

「いらっしゃい」

長谷川は、笑顔で出迎えてくれた。

でもその笑顔は、燈和の大好きな笑顔ではなかつた。
どこか辛そうな、悩んでるような笑顔だつた。

長谷川は、部屋着を着ていた。

パジャマみたいだけど、そうでもないような感じ。
初めて見るから、また新鮮だつた。
そして、髪はちょっとボサボサ。
あとは、机の上に薬が置いてあつた。

「大丈夫…じゃなさそうだね」

「うん、なんかいつぺんに来ちゃつたつて感じだよ
「だよね…」

燈和は、先ほど買ったお茶などを冷蔵庫に入れた。

どうせ買い物もできてないだろうと思ったから、買つてきたのだ。
案の定、冷蔵庫の中はスカスカだつた。

「ありがとね。俺、何にもしてなかつたから…」

「いいよ。これくらい、私にはどうてことないし」

「すつじく助かる」

そう言いながら、大きな手で頭をなでた。

やつぱり子供扱いされている、と思うけど、落ち着く。

長谷川の手は、大きくて指が細くて綺麗で…

でも、手の平にはマメがあつて。

努力の証が、たくさんある。

燈和はこの手が大好きだ。

「無理、したでしょ？」

「何で？」

「手のマメ、あんまり古くないかい…」

「あ、ああ…うん、あんまり動くなつて言われてるけど、やつぱり…ね」

「でも無理すると、ますます復帰できるのが遅くなるよ」

「…そうだよね。反省する」

「でも、努力することほいことだと思つ。努力あつてこののはせさんだもん」

燈和は、料理を作つてあげた。

最近ずっと、インスタント食品ばかり食べていたらしい。いつもは自分で作つてゐるみたいだけど。

長谷川は、おいしそうに食べててくれた。

それが何よりもうれしかった。

洗い物をしていると、テレビで試合を見ていた長谷川がキッチンへ

やって來た。

そして、手伝いを始めた。

「いいよ、私がするつて」

「でも、なんか任せつきりつてのは…」

「大丈夫だよ。家でもこんな風にやつてゐるし」

「そつか、1人暮らしだつたつけ？」

「うん」

「だから慣れてるわけか」

「そうだよ。だから、ゆつくりしてて」

「ありがとう。すつじい助かるよつ」

そう言つと、頬に軽くキスした。

燈和は一瞬、皿を落としてしまいそうになつた。

かろうじで、それはなかつたけど。

洗い物が終わつて長谷川の方に行くと、テレビをつけたままで寝ていた。

その寝顔は、いつ見ても可愛い。

とても30歳には見えない。

もっと幼い…もしかすると、10代でも通るかもしれない。

それほど可愛い。

燈和はテレビを消して、長谷川に布団をかけてあげた。

そして、ソファの隣で眠りについた。

妙にいい匂いがする。

ふわっと香つてぐるその匂い、正体は

「…ん？」

右肩には、長谷川がもたれかかっていた。直で感じる体温、同じリズムを刻む寝息。匂いの正体は、長谷川だった。

洗剤か、石鹼の匂いだろう。

心地よかつた。

まだあんまり目が覚めていなかつたけど、徐々に意識がはつきりしてく。

自分が置かれている状況に気づいたのは、ちょっと後のことだった。時計を見ると、まだ午前6時半過ぎ。

まだ眠さはあるけど、そろそろ起きた方がいい。

だけど右肩には長谷川がいる。

起こすわけにはいかない。

どうするか考えていらひに、長谷川が起き始めた。

「ん…っ」

ぼんやりと田を覚ますと、燈和のほほにて顔をあげた。
近すぎる…

視点が合つのに、ちょっと時間がかかった。

「…」

「…ねむよひ」

そう言いながらも、眠そうにしている。

「まだ眠いでしょ？」

「うん…」

「寝てていいよ。私がご飯作っておくし」

「…ここにいて？」

「くつ？」

「こままがいい…」

また眠りについたようだ。

燈和よりも幼く見えてしまう。

つい、その寝顔に見とれてしまった。

ずっと見ていても飽きない。

だから、人気が絶えないのかもしれない。

ふと気付くと、長谷川の右手が燈和の服の袖をつかんでいた。

自分よりも大きい手が、小さく、可愛く見えた。

ずっとこのままでいたい…

そう思つてしまふのも、長谷川だからだと思つ。

もし長谷川に出会つてなかつたら。

燈和は、自分がどうなつていたか想像が出来なかつた。

この先も、どうなるか分からぬ。

ただ、出来るだけ長谷川を支えていきたいと思つている。
もし迷惑と思つていなかつたら、の話だ。

それから一時間くらいが過ぎた。

ようやく長谷川が眠りから覚めたようだ。

「今度こそ、本当のおはよつ？」

「…」めん、また寝てたみたい

「えつ、自分の意思で寝たんじやなかつたの？」

「いや…寝てたつて事、気付かなかつた」

よほど疲れてるんだ。

もしかして、自分がいるから疲れてしまったのか…

不安がこみあげてきた。

それが、顔に出てしまつたようだ。

「大丈夫だよ。燈和ちゃんがいてくれなかつたら、もっと疲れてたから」

思つていた事が見透かされていた。

驚いたけど、その言葉にホッとした。

少しでも支えになりたい。

支えになれているのならば、それでいい。

雑誌やテレビの取材で、長谷川はずつと言つていた。

『自分は、今は結婚願望ないんで』

燈和はこの年になつて、そんな事も考え始めていた。

この先ずっと、結婚できないんじやないか。

それでも長谷川を支える事が出来るのならそれでいい、そもそも思つたり。

長谷川との結婚を望んでいるわけじゃない。

だからこそ言えることだ。

今ここで伝えておく。

「私も、はせさんみたいに結婚願望ないから、ずっとこのまま支え
ていれたらいいな」

「…それ、本当？」

「うん。やっぱり、嫌？」

長谷川は首を横に大きく振った。

「嫌じゃないよ…っていつか…嬉しい／＼／＼

顔を真っ赤にしながら言つ所なんて、試合中とか想像できない。
きっと、燈和くらいしか知らないと思つ。

「ねえ、なんでそんなんに可愛いの」

「はつ！？俺、可愛いの？」

「カツコいけど…今はすぐ可愛い」

「褒め言葉には聞こえないんだけど…」

「十分褒め言葉だつて」

「じゃあ言つけど、燈和ちゃんの方が可愛いからねつ」

「なつ／＼／それはないつ」

「いや、本当だから」

「はせさんの方が可愛いもん」

他の人から見ると、完全なバカッフル。

でも、これが2人にはちょうどいいのかかもしれない。

『帰つて来た強打者！』

新聞には、そう見出しがついていた。

長谷川は見事に復帰、調子をあげて行ったのだ。

昨日の試合では、HRに盗塁、送りバントも決めればヒットも決める。

守備でも好プレーを連発した。

見事な復帰ぶりに、みんなが不思議と思った。

実際、燈和も不思議だと思つていて。

どうしてここまで復帰できたのか…

その真実を知つているのは、長谷川自身だけだった。

燈和のケータイに、久しぶりな名前が表示された。

同じ野球ファン、妃奈乃だ。

『もしもし、燈和？』

「妃奈乃つ！久しぶりい」

『ホントお久だねえ』

最近の状況を、2人は話していく。

そして、妃奈乃が連絡をかけてきた理由。
大事な報告だった。

「で、何があつた？」

『驚かないでよ』

「うん、大丈夫」

『実は…結婚するんだよつ…』

「…えつ…?う、ウソつ…!..」

『本當だよお』

「…相手は、どんな人?」

『うへん…燈和がよく知つてゐる人、かな?』

「私が知つてゐる人?」

『真田だよ。久々に名前聞いたでしょ?』

ちょっと複雑な心境…

親友が元彼と結婚…

でも、とてもうれしかった。

「おめでとうひー！」

『ありがと』

『いつ式?』

『ちゃんと招待状送るから』

『本当に!/?絶対だよ!』

『もちろん。親友でしょ?』

『やっぱ妃奈乃はいいつー妃奈乃はいろいろと落ち着くつ

『何、それ?』

『なんかね、久しぶりですごい嬉しいんだ』

『私もだよ。そして、最近うまくいってゐるでしょ?』

『ん?』

『ほら、長谷川選手とだよ』

あれから妃奈乃に言つてなかつた。
でも、気づいていた。

「…誰にも言わないでね」

『もちろんんだよ…ひそかに応援してるからね』

「何の応援？」

『燈和もそろそろ結婚かなあって』

「ないつー！」

『そうなの？』

「お互い結婚願望がないんだ」

『あらり…』

「はせさんは野球、私は大学頑張ってるからね」

『2人とも、よくそれですれ違わないねえ』

「私もそれはす”こ”つて思つてる」

遠距離恋愛…

だけど、ずっと続いている。

一途に想い続けていると“つ事もす”こ”。

しかもお互いに。

長谷川なんて、燈和以上に出会いがあるはずだ。

『もし、結婚するつて事があつたら、呼んでね

「ないと思うけど…』

『まあ、いつか来るつて』

『そりかなあ？』

『あつ、今度会える？みんなで集まつて言つてるんだけど』

「うん、いいよ。こつ頃？』

『来月あたりに…』

「来月…あつ、大丈夫だよ」

『本当…？んじゃ、楽しみにしてるからね』

「うん」

久々の親友の声。

喜びに充ち溢れていると言つた感じだ。

あの妃奈乃と真田、

ある意味、いいコンビかも知れない。

燈和は、自分のことのように嬉しかった。

久々に、中学の時からの友達に再会した。

みんなやけに大人びていて、燈和が取り残されているようだった。

「ひいちゃん、変わってないねっ」

「それ、褒め言葉として受け取っていいのかな…」

「もちろん！」

「妃奈乃と真田君かあ… 意外なコンビだなあ」

「そう?かなりお似合いだと思つたけどな」

話題は、自分たちの結婚願望で持ちきりだった。
正直、まだちょっと早い気がする。

だからこそ、燈和にそんな気持ちがない。

長谷川と上手くいってるのは、それがあるからかもしねない。

みんな彼氏がいた。

ケータイで写真を見せてもらつた。
いい人そうで、みんな幸せそうだ。

「燈和は?」

「彼氏ならいるけど…ね」

「写真見せてーつ

「それはちょっと…」

「なんで?」

「それには深い理由がありまして…」

「燈和はかなり上手くいってるよつ」

「そうなの？てか、なんで妃奈乃是知つてんの」

「偶然にも知つてしまつたから～！」

「いいなあ…相手、カツコいい？」

「それはもう、めちゃめちゃイケメンよお」

「年上？年下？同級生？」

「…と、年上」

「燈和らしげ」

その『燈和らしげ』とはどういう事だ…
妃奈乃のおかげで、上手くはぐらかした。
本当は、自慢してもいいくらいの彼氏だ。
でも、相手の事もあつてまだ公表できない。
これも地味に複雑な心境だ。

「」のまま…ずっと隠さないといけないのかなあ？

よく分からぬ。

とにかく、長谷川の気持ち次第だ。

今燈和には、考えることなんてできなかつた。

その頃、実は長谷川も悩んでいた。

後輩が次々と結婚、先輩からも『結婚した方がいい』と言われている。

彼女の存在を、ほとんどの選手が知つていて
でも、実際に見たことある人はいない。

いつまでそれで通すか…悩んでいた。

いつのこと、紹介してしまおうか。

そして、長谷川の計画はひそかに実行へと移されていった。

長谷川から招待されて、選手たちと食事に行つた。いつもテレビで見る人たちに囲まれていると、頭がぐるぐるしていく。

でも、みんな優しかった。
だからホッとした。

「んでもあ……結婚しないわけ？」

「それ、俺だつて悩んでるんだつて」

長谷川は、1番中のいい宇野^{ハセ}と話していた。
しかも小声で。

燈和はどううと、選手と仲良さうに話している。
好印象だ。

長谷川の計画…それは、プロポーズだった。
みんなから言われて、大切な存在に改めて気づいた自分がいる。
結婚願望がなかつたのは事実だ。
ただ、最近は真逆。
だから、周りに相談していた。

「んじやさ、お立ち台で宣誓……とか？」
「は、恥ずかしきる…」
「お前まだそんなこと言つてんのかつ」
「だつて…」

「それじゃ、普通にしたら? ドラマみたいな感じで」

「普通にって?」

「だからね、『俺と結婚してくだれ』的な感じのセリフを、眞面目に言ひ?」

「それもそれで恥ずかしいよね...」

「お前の悪いところ言つてやるつか?」

「おお!」

「すぐ恥ずかしがるとこさ。もつと堂々としたらい?..」

長谷川は惱んだ。

「どう言えばいいのか、どう伝えればいいのか...
結論がなかなか導き出せない。」

「最後にアドバイス。あの子なら、たぶん直球の方がイイね。変化球よりも」

「どういう意味?」

ますます分からなくなってしまった。

初めてかもしない。

ここまで他の人のことで頭がいっぱいになるのは。
人の事を、ここまで考えた事はなかった。

凄いよな...初めてだよ

こんなに悩ませてくれる人は。

長谷川は、直球に絞り込んだ。

それは、きっとどんな球よりもストレート。
自分らしい選択だ、と思つた。

040 初めて会ったその場所で

それは突然だつた。

まさか、長谷川が来るとは思つてもいなかつた。
燈和の住んでる近くの公園。

そこは、キャンプ地としても有名な…
そう、2人が出会つた場所である。

朝早くに、長谷川から連絡が来た。

『今日、そつちに行く』と。

キャンプシーズン真っただ中。
選手は休日。

偶然、燈和にも時間があつた。
2人が出会つたその場所で…

突然のプロポーズ…言葉が出なかつた。

結婚願望がない、とあれほど言つていた長谷川。
だから驚きを隠せなかつた。

しかも、超ストレートに。

「俺と結婚してください」

ただそれだけの言葉。

でも、十分すぎるほど伝わつてきた。

それも長谷川らしいな…つて。

燈和は首を縦に振つた。

その様子を見て、長谷川はホッと胸をなでおろした。

ここでもしつられてしまつたら…そう思つていたからだ。
お互に安心しきつた。

だからこそ、2人とも緊張なしの笑みがこぼれているのだ。
2月上旬、いくら南国と言わわれていてもやつぱり寒い。
でも、2人の時間はとても温かいものだつた。

開幕戦、そしてシーズンが始まつた。

長谷川は今まで以上の好成績。
そして人気も絶えなかつた。

ある日のヒーローインタビュー、宇野とのショットだつた。

『あの、ハセが言いたい事あるらしいので…』

『はっ、何それ！？』

『ほら…報告は？』

宇野に促されて、マイクを受け取る。
そして、ひとつ深呼吸した。

ファンがいる前で、自分の口から報告しなくては。
球団HPに載る前に、自分の口から報告する。
無理を言って、まだHPで公表しないようにしてもらつた。
それはほとんど宇野がしたのだけビ。

『えつと…みなさんに報告があります』

ファンが静かになる。
またひとつ、深呼吸。

『えー…僕は、来月結婚しますっ』

球場はどよめいた。

そして、すぐに拍手へと変わっていました。
長谷川に、もう悔いはない。

球場へと足を運んでいた燈和。

ファンがたくさんいる外野席で、1人号泣していました。
周りの女性ファンも号泣している。
でも、涙の意味は全く違うものだつた。

長谷川智行選手が入籍

翌日の球団HPには、そう載つた。

040 初めて会ったその場所で（後書き）

いやあ、かなりな駄作ぶりでしたな..

作者、展開思いつかなくなつたんで途中から諦め入っちゃつてしまつたあ（笑）

これ、家立てる時で書つと『手抜き工事』だなww

こんな駄作を最後まで読んで下さつた方、本当にありがとうございます
ました！！

お気に入り登録してくれた方にも感謝、感謝あります
長い間お付き合いくださり、ありがとうございました

■青矢しづく■

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7879m/>

私の彼氏は野球選手

2010年12月20日23時04分発行